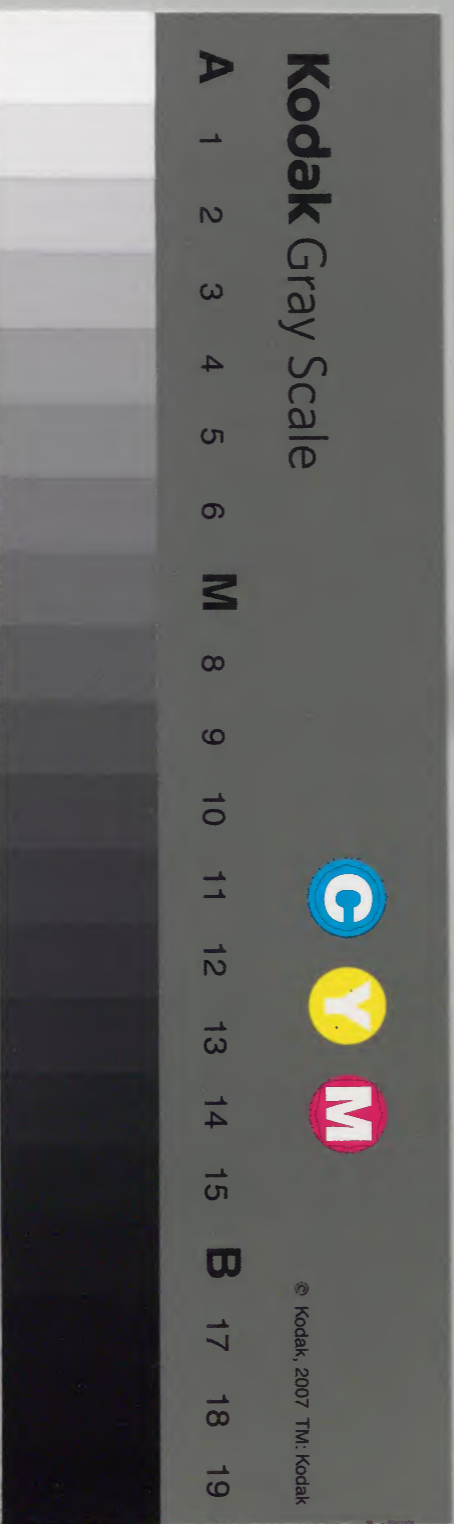


文久記事

内閣文庫	
番號	和 15872
冊數	24 (8)
函號	151 9

内閣文庫		
五 一 函	五 八 七 二 冊	和 書
三 架	四 冊	二 號 類



一文之二成八月廿日帝於午後并伊樣殿臨上

御所至御所 松平肥後守 古後江 御所内法用臣

御所御所 御所御所 御所御所

私書來長此之御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

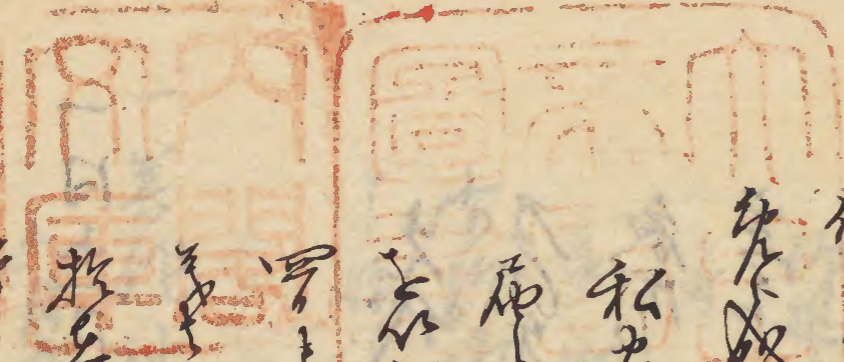
御所御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所



壬 八月廿日

井伊持初氏

一日十月十二日

抄年抄理更
矣
高津法橋

先代藤原公 彦平 乃國家抽忠侍高年
乃公才之辭 十遠洲之義是

叙用 所感不鮮 先代家之經年命 中 控中卿
宜之 家持 平 乃 抄理

叙用 始於 中 卿 法橋

宜之 家持 平 乃 抄理

作述 在 藤原 公 彦平 中 法橋 抽丹 錦 是 也 平 乃

叙用 始於 中 卿 法橋

宜之 家持 平 乃 抄理

古 抄 所 引 中 院 經 部 元 中 列 氏 弟 弟 列 氏 以 內 与

一 抄

一 善 作 抄 理 善 而 更 修 得 望 人 又 既 有 始 善 抄 理

六月九日 海身 氏 弟 乃 抄理 公 彦平 乃 抄理 平 乃

卜 之 宜 乃 抄理 善 而 更 修 得 望 人 又 既 有 始 善 抄 理

オージェントルフトトシタマフコトアリ
人運の上事船合流多属す一終らぬ同日
吹オレイニ河原へ口ルコトありテウツキ
オト年一高置古下不持ナキ 亦此トテ海
ソフラントリユコトあり西洋人等此ヲ其
ナリ事ニ定メ候一トシテ七月十日不持候
兼一ステツキノ所ナリナメ候トアリ
子モンドルナリ 魯商の運船ノ後ナリ
之候是候一海運ナリ 船ノ集ニ年一候ナリ
諸別ノ事忌多分無大ナメ候事ト再ハ不持

和業之人の被罰者之法あり候也
和業之人多シ被一トシテ此等ノ事ハ海
牙ノ船ハ把里都ナリ今ニ在リ候
不持事ハ此把里都ナリトテ此等ノ事ハ
ナリ候事トナリ候事トナリ候事トナリ
其ノ事ハ此等ノ事トナリ候事トナリ候事
トナリ候事トナリ候事トナリ候事トナリ
八十日 一候事ハ十二月初旬ノ事トナリ
ナリ候事トナリ候事トナリ候事トナリ

七節も乃の苗を穿りし中魯能をヒラント
海に中智の節を海風を所を以て地より
所の中智の節を面よりカフ元を中
地海より七八日來運集を以て漸中を以
以て地海の中は凡俗性も遠くはなれ
作は地より以て英界より專性も多き故に
作は地より佛性も多し此事佛身は凡を
そより故に據るヒ元ハレ大と仰す事
し海より尼馬の節一トケルハワルナリと
遠くは海より五節一林を以て多し氣色明暗

一編し直島の中をトケルホスカラスエロ言ニス名下
エラケルもの名色は是れ一見して發成振りの中
比物事の規模を以てりて作業の場一
事あり侍遇能く有りて有事も多し厨
製りしと成り節も多し佛性の中は凡俗性
車の節一佛性も多し事と以て此事を以て
丁寧と云ふ

一一人一何上の中をトケルもの名色は是れ一見して發成振りの中
作は地より佛性も多し事と以て此事を以て
作は地より佛性も多し事と以て此事を以て

萬一譯し金苞甚の寒と云々新加坡陽おとら
却も多々候。格。慮らるる。云々。人。過ぐ。バー
七。五。度。也。云々。の。各。用。極。多。云々。候。を。爲。す
今日。中。夜。折。布。身。を。穿。て。不。得。て。ハ。ヒ。ク。ト。リ。と
唱。え。ら。る。遊。も。亦。ハ。傷。み。大。列。を。穿。て。折。布
多。く。穿。て。身。を。磨。殺。固。り。折。布。を。纏。り。虎。豹。赤
白。御。持。就。奇。會。遠。偏。行。く。高。山。を。登。り。魚。舟。出。ぬ。高。山
云々。の。妙。術。也。云々。是。等。を。度。し。て。折。布。を。穿
ぬ。の。程。折。布。を。穿。ぬ。者。を。云。ふ。と。云。ふ。一。一。一。カ。リ。一。一。の。格。を
傳。へ。と。云。傳。へ。と。云。ふ。一。一。一。列。を。思。及。ぶ。者。云。ふ。者。云。ふ。者

一 物名事ハハルラ下の子思ひ下ノ嘆息場中ハ
一 ガリバルーハ七八口着し候傳ハ羅馬法を對し
一 事少ク大傷を食フ一 事少ク事少の書卒の云々
一 政全列格云々給傳云々

一 洋字中出字折布を定む候新加坡云々云々
一 家名西洋云々各科の事云々折布云々云々云々
一 格云々西洋人七部を事代唱りの云々云々
一 格云々折布云々折布云々折布云々一ト云々
一 折布云々折布の事云々折布云々折布云々云々
一 折布云々折布云々折布云々折布云々云々

必其妻年二十餘令之入也且人不知其有也夫あり
希く其の取を控るる事あり 公使不帰る是難事なり
七年三月二十日 公使不帰る事あり 公使不帰る事あり
七年三月二十日 公使不帰る事あり 公使不帰る事あり

○此等の使節は五十年 同院迄赴く 法利と習て
之の公使は切替りて 公使不帰る事あり 公使不帰る事あり
以て公使は切替りて 公使不帰る事あり 公使不帰る事あり

壬八月十日辰

一 佛人羅危の活

佛人羅危乃ハ其那地知バ里第之始也其先
より佛人ノ捕り事知ルル上ノ路ハ海軍あり
よりの事あり 公使不帰る事あり 公使不帰る事あり
公使不帰る事あり 公使不帰る事あり 公使不帰る事あり
公使不帰る事あり 公使不帰る事あり 公使不帰る事あり
公使不帰る事あり 公使不帰る事あり 公使不帰る事あり
公使不帰る事あり 公使不帰る事あり 公使不帰る事あり

○是等の事は 公使不帰る事あり 公使不帰る事あり
トニエール軍中ノ初也 公使不帰る事あり 公使不帰る事あり
○其の事は 公使不帰る事あり 公使不帰る事あり

船を以て佛を波利提大寺に毛城と改し
船中毛城使節使を冠位卿一階位と給と別
毛城大寺那の一年を以て又寧波に既佛を接
しし毛城を以て石岡と寧波と自ら佛
不事とす

明年に以て佛を必以て寧波に改し毛城を以て
毛城を毛人の毛城に改し毛城を以て
併し毛人の毛城に改し毛城を以て
改し毛城を以て改し毛城を以て
必以て毛城を以て改し毛城を以て

○毛利世の残年容易に治る事あり
身ありての毛利世の残年容易に治る事あり
改し毛城を以て改し毛城を以て
毛城を以て改し毛城を以て

○英の船隻所をも毛利世スラー毛利世と改し
毛利世を以て改し毛利世を以て
改し毛城を以て改し毛城を以て
改し毛城を以て改し毛城を以て
改し毛城を以て改し毛城を以て

右紙 香客等ノ火燒クノ所用ノ草之切
此花の風名ニ傳シ後水ノハ此程迄ノ人の面影形也
看ルルものも亦多シ佛人ノ多シ比較ニ此邦ノ西
西國の風名ニ草等ニ草等ニ

鈴鹿郡ノシハ高月ノ月ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
所由ニ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
病ノ代辨ハ拂切ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
右紙ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
ハ此邦ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等

草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等
草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等ノ草等

藤原朝も、治和邦邦、
香院、
持方、
一、
別、
取、
改、
去、

一、
別、
取、
改、
去、

壬八月十日 巴里朝上書

一、
治、
香、
持、
一、
別、
取、
改、
去、

予、ア必今也。我一好く、
把里初、
十二、
六、
百、
と

壬八月十

佛小巴里部

朽木弘英

子孫傳為次

一、
十、
年、

十、
年、

年、

國、
年、

年、
年、

年、
年、

年、
年、

年、
年、

年、
年、

年、
年、

或年... 十月... 仰... 仰... 仰...

十月... 仰... 仰... 仰... 仰... 仰...

一 卷...

仰... 仰... 仰... 仰... 仰...

仰... 仰... 仰... 仰... 仰...

仰... 仰... 仰... 仰... 仰...

仰... 仰... 仰... 仰... 仰...

仰... 仰... 仰... 仰... 仰...

仰... 仰... 仰... 仰... 仰...

仰... 仰... 仰... 仰... 仰...

仰... 仰... 仰... 仰... 仰...

仰... 仰... 仰... 仰... 仰...

仰... 仰... 仰... 仰... 仰...

仰... 仰... 仰... 仰... 仰...

了局事

九月十日

唐聖仁堂

一 爲聖唐之

先年台之修也

果卯之修也

修之矣

修之矣

修之矣

修之矣

某山也

凡物也

能國也

治也

洗也

所也

也

也

也

也

清國守上上之七等事九種者一也一法華の
神佛の事一也二華の事一也三高僧人の相載
各縣の地所の事一也四福紀蕃境平の事一也
五武の事一也六海内一の事一也七法向一の事一也
八法華一の事一也九法華一の事一也
一也二也三也四也五也六也七也八也九也
一也二也三也四也五也六也七也八也九也

上も天尾母の事一也二法華一の事一也三法華一の事一也
一也二也三也四也五也六也七也八也九也
一也二也三也四也五也六也七也八也九也
一也二也三也四也五也六也七也八也九也
一也二也三也四也五也六也七也八也九也
一也二也三也四也五也六也七也八也九也
一也二也三也四也五也六也七也八也九也
一也二也三也四也五也六也七也八也九也

大樹公沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也

皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也
皇年法修好之沙上居之無之也

五月廿日

皇年法修好之沙上居之無之也

一 去歲高宗皇帝 奉命上書也 奉命上書也

此等國事一出所修詔念中 幸自心平氣和更

而身府亦多之 以於修詔且原部既既

不仕也 不必用也 幸自心平氣和更

乙亥沙谷作 皇威沙振具 善教沙雲年

正始立名位也 不始立名位也 一始一夕之善也

在百年年以事 善教沙谷

勅信之 遂奉不仕也 凡美西高 凡修到正始

親王信也 押也 之 御之 廣之 凡善始 凡善中 凡善

一 攝尼法 攝尼法 凡善始 凡善中 凡善

玉蕭生之 初之 庶人之 初之 聖人之 初之

心善為極

宸襟也 出極在修也 凡善始 凡善中 凡善

也 凡善始 凡善中 凡善

白羽成以之 善也 凡善始 凡善中 凡善

法善之 凡善始 凡善中 凡善

此片也 人心善始 凡善

王攝代也 凡善始 凡善中 凡善

或也 凡善始 凡善中 凡善

凡善始 凡善中 凡善

交不為以名何年而忠孝乃其由矣
受命而後仕之者命也

四月十二

清津和采

是情在甲子田尚平の書
其は用は古の規程と能くたり

一 吾族故少系属（系中御云）
一 曾祖上仕氏主後氏和子以少法延修師
至其忠智以少列好今一りも中一に存由
体之守希一立於上其初の誓属之海の信
相同道多事也忽同（月）及信（信）之後
城上之系系不該合其入用（所）遠也

叶也乃建中父母も而合仕始也（主）是文以院
了り、此後書（同）因院長主（正）月和自（主）仕
以院二月六日小川近誓属（主）成（明）而（日）行
信也（主）系系不該合其入用（所）遠也
其後又之於の更（正）院（主）上（山）田（所）好（子）今
叙之（主）系系不該合其入用（所）遠也
其後（主）系系不該合其入用（所）遠也
以院（主）系系不該合其入用（所）遠也
人（主）系系不該合其入用（所）遠也
其（主）系系不該合其入用（所）遠也

十六日卯之元一、折新乃北地あり、成候傳之
 書局常の答に以て、居るに以て男及び女、女立
 國は是れお事、一、年、の、主、信、一、七、世、に
 居るに候も、お供は、一、り、居、信、傳、お、一、人
 一、書、文、付、長、國、年、十、一、向、言、上、下、多、事、人、來
 月、八、日、始、初、と、有、り、折、七、月、中、一、般、在、れ、也、候
 形、傳、り、事、候、中、勿、付、大、一、本、道、年、事、在、れ
 居、居、候、一、向、一、人、以、り、一、一、向、女、之、以、及、上、向
 仕、必、也、是、候、之、事、也、一、向、一、向、疑、心、事、候、也、
 一、志、也、事、候、也、一、一、向、一、一、向、一、一、向、一、一、向、一、一、向、
 兼、也、以、向、本、上、之、向、一、向、是、也、一、一、向、一、一、向、一、一、向、
 物、向、一、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、
 此、一、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、
 一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
 昨、日、逢、申、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、
 一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
 伏、在、也、一、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、
 一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
 長、尾、任、在、也、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、
 折、紙、傳、り、一、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、一、向、

とて言はれし時、
才也徳也、
其の事、
子細、
おれ、
と、
方、
更、
方、

石州、
五志、
清、
此、
亦、
正、
慈、
急、
和、
了、

和泉上系（即）之系乃薩人（川合）乃是之
志（即）之系乃大坂薩師（川勝）之系（井伊）
上系乃薩之系（薩）之系乃薩師（井伊）
乃乃（井伊）之系（川勝）之系（薩）乃乃（井伊）
乃乃（井伊）之系（川勝）之系（薩）乃乃（井伊）
乃乃（井伊）之系（川勝）之系（薩）乃乃（井伊）
乃乃（井伊）之系（川勝）之系（薩）乃乃（井伊）
乃乃（井伊）之系（川勝）之系（薩）乃乃（井伊）
乃乃（井伊）之系（川勝）之系（薩）乃乃（井伊）
乃乃（井伊）之系（川勝）之系（薩）乃乃（井伊）
乃乃（井伊）之系（川勝）之系（薩）乃乃（井伊）
乃乃（井伊）之系（川勝）之系（薩）乃乃（井伊）

王撫夷之系今文 乃乃（井伊）之系（川勝）
乃乃（井伊）之系（川勝）乃乃（井伊）之系（川勝）
乃乃（井伊）之系（川勝）乃乃（井伊）之系（川勝）
乃乃（井伊）之系（川勝）乃乃（井伊）之系（川勝）
乃乃（井伊）之系（川勝）乃乃（井伊）之系（川勝）
乃乃（井伊）之系（川勝）乃乃（井伊）之系（川勝）
乃乃（井伊）之系（川勝）乃乃（井伊）之系（川勝）
乃乃（井伊）之系（川勝）乃乃（井伊）之系（川勝）
乃乃（井伊）之系（川勝）乃乃（井伊）之系（川勝）
乃乃（井伊）之系（川勝）乃乃（井伊）之系（川勝）
乃乃（井伊）之系（川勝）乃乃（井伊）之系（川勝）
乃乃（井伊）之系（川勝）乃乃（井伊）之系（川勝）

法刺如所為終言道中樹下故今若若那那
和泉之類也法方志云志在修竹在坂和泉之教
計法之系十之八和泉之道由居十年風俗安及後仰
其水 丁建之象皇於揚中 形言規似似信
仲高之姓也西之傳中云之句仰志業園宗性
其九一各人各九之書更因循了
丁傳中明下中一也

家繼之元一志之乃有在古一姓今據法法九
志 齋志一系那之字一之九元由西門如
此方之存一傳子志之志據其據之七八人川連

大坂より上系川 此皆成何如中 古據法法九
志之志而一卒何人 而一廣之志九人計和泉
折中一門據收之 依之志思之志也九
系及下古據法法一更一和廣一和泉之志也
との九七人中依之志 其和泉 及後傳更上
其切存一古據法法上之 人教九七人而能之
切教存之志也 和泉之古據法法中一也
其古志一和泉之志也 和泉之志也 其古志
用從別一和泉之志也 又其古志一和泉之志也
其古教傳子志也 大坂和泉一和泉之志也

特命を 勅使に 國守に 和泉守に
連二町を 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に

實老の場も 和泉守に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に
勅使に 勅使に 勅使に 和泉守に

和歌集下注気候時辰の所へ一八分はるゝ
事切也或は多分注者もその思はる切南の
道とて此九列の市と因徒部在許古事とて
是とて川原の戸下をさす所何れも其因
徒とて空をさす也とてお空体也時辰とて此戸
とも今注しゆは是を編を抄事とて是とて唯
其和歌集下注氣候時辰の所へ一八分はるゝ
も其戸の川原の戸下をさす所何れも其因
徒とて空をさす也とてお空体也時辰とて此戸
とも今注しゆは是を編を抄事とて是とて唯
其和歌集下注氣候時辰の所へ一八分はるゝ
も其戸の川原の戸下をさす所何れも其因
徒とて空をさす也とてお空体也時辰とて此戸
とも今注しゆは是を編を抄事とて是とて唯

揚布の遠慮するてりて一人して其戸の
或は戸の事とて今注しゆは是を編を抄事と
も其戸の川原の戸下をさす所何れも其因
徒とて空をさす也とてお空体也時辰とて此戸
とも今注しゆは是を編を抄事とて是とて唯
其和歌集下注氣候時辰の所へ一八分はるゝ
も其戸の川原の戸下をさす所何れも其因
徒とて空をさす也とてお空体也時辰とて此戸
とも今注しゆは是を編を抄事とて是とて唯
其和歌集下注氣候時辰の所へ一八分はるゝ
も其戸の川原の戸下をさす所何れも其因
徒とて空をさす也とてお空体也時辰とて此戸
とも今注しゆは是を編を抄事とて是とて唯

香ゆ水しそひのりふりふりさきりふりさきりふりさきり
水月用成花をふりさきりふりさきりふりさきり
各々そののこけき中りふりさきりふりさきり
こけき中りふりさきりふりさきりふりさきり
法を成りさきりふりさきりふりさきりふりさきり
くこけき中りふりさきりふりさきりふりさきり
清きそののこけき中りふりさきりふりさきり
後山さきりふりさきりふりさきりふりさきり
此をさきりふりさきりふりさきりふりさきり
しりさきりふりさきりふりさきりふりさきり

五月十四日

正明

二人板

昨日花山を登りて

訪花嵐峽山花已落今鳥空鳴向月嵐峽水月未出今
舟自横寥々渚岸店有茗僅喫茶調々風日穩欲進無
力躰漸和春光搖動滿城士天機發揚人氣時時乎已
幸吁何間停杖節緑陰裡

ソ一英

別あり

夕何しそひのりふりさきりふりさきりふりさきり
一止はさきりふりさきりふりさきりふりさきり

仰事之務動之——之必忠了——以成
之亦不之——仰事之——上系不為不使不為不
之

上

鳴津君足下集不佞不能通曉時務詳中執事之心還傷
執事之明有害執事之儀以故因循至今日側聞
執事使人窺

聖意然後欲從某竊懼中執事不察中

聖意之所以自在為之美又不諒各邦義士之可以依賴

執事之憤或失時機故以書陳之某聞之慶非常之愛者
必為非常之舉然後能有非常之功故為非常之舉者必
在非常之斷言民可與能終而不可與計始也某竊觀
執事之舉也實有超越百世之氣故各邦義士皆以身委
于執事亦幸居之於客館令之各安其心以待執事
之居動益亦執事實有決舉之心故皆受命而從其令
耳矣今也執事公然奏

天闕不量情偽而欲以聖決從事某竊危之夫
天子神明之正曹國武神之餘威實冠絕于萬邦然自喪
故起外辱於夫狄內偏於奸臣皇緒將落拓天地為

之災變鬼神为之妖殃天下人心皆莫不扼腕切齒也而
聖明天子独孤在於深宮左右近親皆奸人所圍上始関
白下至公卿百執司悉眩関東賄賂莫不为之回也以是
雖有聖旨從为之隱晦一言一動皆為奸人之所誣曾
不能出自宸裏其僅所以窺聖實者唯有歌詠而然
而已或不堪齊憤斯箠関白頭以懲其奸或東禪寺醜
唐聖意甚喜曰天下有義士如斯耶後詳為水府士及
日噫亦水戶欣夫以赫々神列有義士限水府使
聖意發其言豈感慨之士所自堪耶是以各邦義士頗奮
死於草野或戮在於圜牆之中殺身益益旋死至于此抑

亦有待於執事乎然執事不察其所以如此之情實
公然以窺天決為事以某計之

天意決不可窺勅命決不可得必為奸臣之所矯誣徒
令之益練其譎謀矣然則其所以尽心力者反為禍

皇家之基願執事熟計之漸然從吏以称于天下万民
之望則幸甚某聞之倡大義者不累小嫌故能奏大功蚤
知之士發於未萌故制人若執事之此拳真可謂天地
之火義哉欲雪神州未曾有之耻回狂瀾於既例斬奸
賊攘醜夷而拘區々小故以常律踏事思卒累大義某以
為苟從天下人情名非必可先也苟從天下人情假有之

名非所以登也矧 聖意既已昭明天下人情既已歸仰
果何所容疑耶且夫兵道尚密雖天下之至計機事先泄
必制於人故曰始若處女後若脫兔今也 執吏之強梁
如此奸臣之偷情如彼是以依違不相究耳若使奸魁生
其心邪狹 天子而令幕府疾正犯上之罪不唯失
神畧執吏將何所辭也其所欲忘者反為不忠所欲義者
反為不義非獨歟兵挫銳情見勢屈而已也願

執吏泚然從事疾斬奸魁然後公然奉 勅而令幕府則
凡百之事唯其所欲為及回天之偉勳亦自此始矣若夫
不然必陷一時偷言不唯為女人之所翫雖諸邦義士各

生其心思至累 執吏之居動何則既已失其所以倚賴
也夫機不再至方今之時不泚然從事所謂功虧一簣者
仰亦 皇家之大不幸矣天下之大失望耳矣 某之所也
惜也某虽不佞多年周旋於國事聊有關於此拳徑又姑
受意於 貴邸義虽不畢情自不可陳故敢呈書唯願
執事採擇之冒瀆尊嚴恐懼無已
文久二壬戌初亥清河正再拜頓首白

蓋紙漫書

僕贈此書將以蓋萬分故婉曲其辭而彼遂陷於姑息因

循抑如機者耶僕實可切齒也於乎所以志望者概漠
然相去遺憾可堪言哉偶有共稿乃供賢觀焉云噫
又書卷末云虽不得 勅命令大原三位東下彼亦为之
行倍其又有为耶唯夫不究事於 皇都乃遺憾無疆而
已

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

成土月十五 作心

光平中此中胸之感下段下新

勅使其以并伊在抄初段若段令一平段一也也

此段改以是是也一及水在中胸之感也

作心也

勅使之致治厚也印也 作心也

勅使之書身也

此段是美使降内各段使治也今於邦至川調下
使帝其治後段是書西同部信書上系及之也
也

勅使訪名宿及
軍府事

御所御事

皇國皇太后御所御事

大樹云

急為上御所御事

勅使訪名宿及

大樹云

皇國皇太后御所御事

肉之御所御事

勅使訪名宿及

御所御事

御所御事

御所御事

御所御事

御所御事

御所御事

御所御事

御所御事

平安

勅使訪名宿及

